

おとさだ 乙貞

第266号 通巻46第3号
令和8（2026）年8月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター
〒524-0212 守山市服部町2250番地

TEL&Fax 077（585）4397
Mail maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

暦の上では、大暑も末候の潤土^{じょくしよ}溽暑（つちうるおうてみしあつし）、夏の暑さも最高潮に達し、強い陽射しによって水蒸気が立ち上がり、この上ない蒸し暑い時期とでも意識することができます。

今年は熱波に見舞われたヨーロッパ大陸ですが、例年は気温は上がっても乾燥しているため、比較的過ごしやすい日々が続くようです。しかし、一方の日本列島は、高気温のうえに太平洋高気圧が無尽蔵の暖かく湿った空気をもたらすため、まさに茹だるような暑さが続きます。この時候を受けて、発掘作業に携わられている方々、屋外で勤しまれる皆様に労う冒頭文を用意していた最中の7月28日に、またしても熊本県で震度7の地震が発生しました。被害状況はまだ詳らかではありませんが、地震でお亡くなりになられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災されました皆様方には、復旧が捗り、一刻も早く安寧を取り戻されますことを切にお祈りいたします。

さて、今回の被災地は10年前の2016年の4月にも「熊本地震」が発生しており、尊い人命や財産が奪われたことは記憶に新しいところです。前回の地震被害の復興のシンボルともいえる熊本城で、今また石垣の崩落がありました。復旧の長期見通しが伝えられるようになった矢先のことで心が痛みます。

溽暑の今日この頃ですが、今季新たに30℃以上の真夏日、35℃以上の猛暑日の更に上をいく酷暑日が設定されました。気温40℃越えが常態化するに相応して、熱中症警戒アラートが連日のように発令されています。地震災害に見舞われました皆様方も何卒、ご自愛ください。

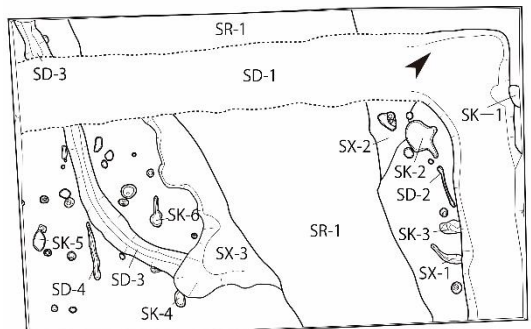
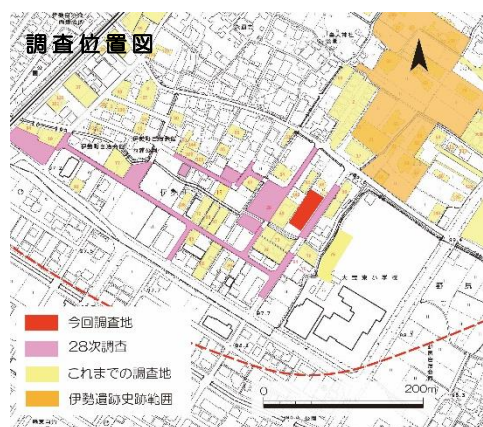
発掘調査だより

伊勢遺跡第151次調査

伊勢町字南東浦における集合住宅建築工事に先立って、伊勢遺跡151次調査を6月15日に着手しました。

現在まで、下図のとおり、溝（SD-1～4）や土壌（SK-1～6）、落ち込み遺構（SX-1～3）、自然流路（SR-1）とピット多数を検出しています。

SD-1は幅3m、深さ50cmの規模を測ります。調査地北隅でほぼ直角に屈曲し、北東辺でSR-1を切り込んで調査区外に伸びます。この溝からは土師器羽釜、黒色土



遺構検出平面図

器碗が出土することから鎌倉時代の屋敷地が集落に伴う区画溝と考えられます。

また、SD-3は、土師器壺、甕、高坏が出土していて、古墳時代前期に時期比定できます。

SR-1は川幅14m、深さ75cmを測る自然流路で、古墳時代前期の土器が出土しています。

現在、調査継続中ですので、次号乙貞で今回の調査成果をまとめて報告いたします。（沖田）

整理調査だより 阿比留遺跡第6次・8～15次調査

現在、一昨年に実施した6次調査と併せて昨年度実施の8～15次調査について整理作業を実施しています。今回は第6次調査分を整理調査だよりとして報告します。

古墳の周濠から出土した石見型木製品などの木製樹物の整理作業を終了し、現在は、埴輪と土器の接合作業、実測作業を継続しています。

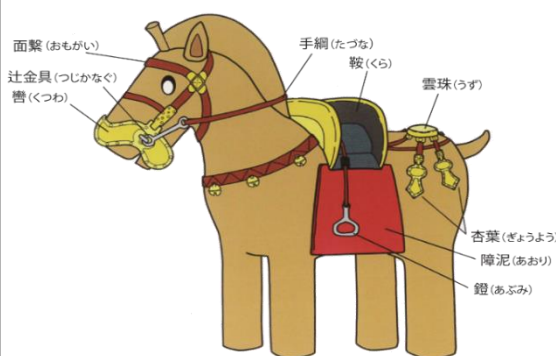
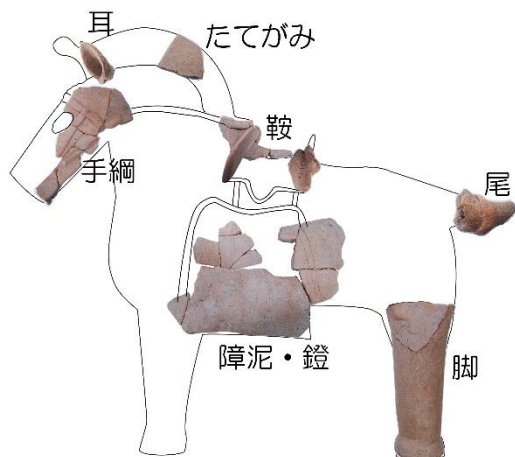
土器では、数個体分の須恵器の大型甕の細片が多く出土しています。しかし、部位を特定できないものが多く、接合作業は捗っていません。埴輪について



須恵器の大甕の接合作業風景



形象埴輪の接合作業風景（第8次調査出土品）



馬形埴輪の部位名称

「考古学からみた日本古代国家と古代文化」近つ飛鳥博物館

も、円筒埴輪、形象埴輪を問わず、胎土や焼成状態に均質性があり、個体ごとの分別が難しい状況で、その接合、復元作業に時間を費やしています。

2号墳は周濠から出土した埴輪片から、馬形埴輪を立てていたことがわかっていました。

しかし、破碎が激しいことなどから全容を復元することはできません。中図のように、耳や尾、脚、たてがみと馬具の鞍、手綱、障泥・鎧を比定することができますが、下図のイラストに描かれている鈴や杏葉などの飾りは特定されていません。単に見つからないのか、あるいは飾り馬ではなく実用馬を象った埴輪なのかもしれません。

さて、馬形埴輪の馬の姿形をご覧くださいと、現在の馬とはイメージが異なります。馬のたてがみは切り揃えられてモヒカンのように立っています。前髪も丁髷のように結っていて、尻尾は短く巻き上げられています。そして、引手金具がつく轡や手綱、面繫、辻金具が表現されていて、胴には障泥や鞍、鎧を付けています。馬形埴輪からは古墳時代の軍馬のいでたちをうかがうことができます

『魏志倭人伝』には、「其地無牛馬虎豹羊鵠」と書き留められていて、弥生時代の日本には牛や馬がいなかったことがわかります。しかし、5世紀前半になると、馬は戦いの武器として飼育が始まり、5世紀の終わり頃、馬形埴輪は数ある形象埴輪の中でも最後に人物埴輪とともに登場します。

『日本書紀』の記述からは、馬形埴輪は動物形埴輪の中では別格の存在であったことがわかります。馬が人に最も近い動物として扱われていたのは、ともに戦争で戦った関係性に他なりません。

令和8年度 歴史入門講座を開講しました！

恒例の歴史入門講座を開講しました。本年度は「原始・古代の造形」の統一テーマの下で、11月を除く毎月、全6講開催いたします。

【第1講】6月20日（土）に山口誠司さん（〔公財〕滋賀県文化財保護協会）に、「瓦からみた秀吉の時代」と題し、ご講演いただきました。



第1講講演風景



第1講開催風景

近世城郭は天守と総石垣、そして瓦葺き屋根が特徴づけられていますが、山口さんの研究テーマのひとつが中近世の瓦です。

今回の講演では、瓦の中でも、織豊期の金箔瓦を取り上げ、安土城など、実際の城郭出土瓦を豊臣期以前、以後に区分し、その違いを具に解説いただきました。好評を博している大河ドラマ「豊臣兄弟」と時代背景が重なるためか、受講者は皆、大変興味深く受講されていました。



講演風景

続く第2講は、7月18日（土）に開催しました。ご講演いただいたテーマは「矢穴による石の造形～中世近江の石切技術」、講師は渡邊貴洋さん（野洲市歴史民俗資料館）でした。

石切場で切り出された石材は築城現場に運び込まれ、反り立つ石垣が築かれたり、石仏などの石造品の石材になります。石切り場では、巨石に矢穴と呼ばれる穴を穿ち、そこにくさび（矢）を打ち込んで、望みの大きさ、形に石を割りますが、この石切り技術は矢穴技法と呼ばれています。

渡邊さんの研究テーマは石切技術で、各地の石材に残る矢穴の微細な違いが話の始まりでした。

一つの石切りにどれだけの石工が従事したかなども言及されたうえで、近江の中近世社会を石切り技術の視座から概観されました。

考古学分野の講座としてはやや専門性が高い分、興味深い講演内容でした。

山口さん、渡邊さん、ご講演ありがとうございました！



約60名の受講者は熱心に受講されていました。

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』やFacebookからもご覧いただけます！



歴史のまち守山はコチラから
<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶
<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



河西学区「まが玉づくり体験が開催されました！」

6月6日（土）、当センターでまが玉づくり体験が開催されました。

この催しは、当センターを会場に河西学区社会福祉協議会が主催するもので、恒例となっています。今回の参加者は小学2～5年生30名で、悪銭苦闘しながらも、約90分の間に思いの勾玉を完成させました。

参加された皆さん、そして主催していただいた河西学区社会福祉協議会の皆さん、お疲れさまでした！



参加者の集合写真

スポット展示 「現在整理作業中！阿比留6次調査」を始めました！

6月25日より表記のスポット展示「現在整理作業中！阿比留6次調査」を始めました。

阿比留遺跡第6次調査、略して阿比留6次調査は一昨年、2024年に実施し、埋没古墳の周濠から出土例の少ない木製樹物などが見つかったことで注目されました。



スポット展示風景

現在は、古墳の周濠以外の遺構から出土した土器の整理作業を行っている現在進行形の土器を展示しています。

接合作業を終え、これからの実測作業を待つ土器たちで、接合時の洗濯ばさみをつけた土器、全体の形がわからない土器も展示しています
このスポット展示は9月中頃までの予定です。

ご来館の折には覗いていただきますようお願いいたします。



スポット展示掲示パネル

【後記】発掘調査で貨幣が見つかることは少なくありません。古代の遺跡からは和同開珎をはじめとする皇朝十二銭が、中世集落からは中国の銭貨が出土します。銭貨は年代を決定するにはまたとない出土遺物です。

中世の場合、銭貨、つまりお金は、陶器壺に蓄えた状態で出土することもあります。紐を通して束ねた状態で出土したお金をご覧になった方も多いのではないのでしょうか。

この紐通しのお金は趣味的なものではなく、中国由来の緡銭^{さしげに}と呼ばれるもので、現在は1円玉から一万円札までの通貨が用意されていますが、一文の銭貨しかなかった時代に、高額の代金支払を効率的に行うために、前もってお金を束ねておいて、それ自身を通貨としたものです。緡銭は通常、97、96枚の銭貨を紐通ししています。3、4枚足らない勘定にはなりますが、それを百文の価値があるとする省陌という商慣習も中国を中心とする東アジアで共有されていました。銭貨の枚数不足でも百文の価値が担保された緡銭が中世の日本では、さしずめ1文銭を1円とするなら百円硬貨として流通していたのです。

古代以降、日中関係は中華思想に因って隷属的な関係ではあったにせよ、漢字を始め、暦や律令という政治制度や文化を中国から享受しました。律令時代の貨幣経済への移行もそのひとつでした。しかし、肝となる銭貨不足で一旦は頓挫しましたが、中世になって、宋銭などの中国銭が日本国内の通貨を代替したことで、ようやく貨幣経済社会が発展します。寛永6年（1639）に寛永通宝が鑄造されるまでのおよそ500年間、外貨が日本国内の商取引を牽引したことで経済発展を遂げた史実も再認識しなければなりません。

（馬耳東風）